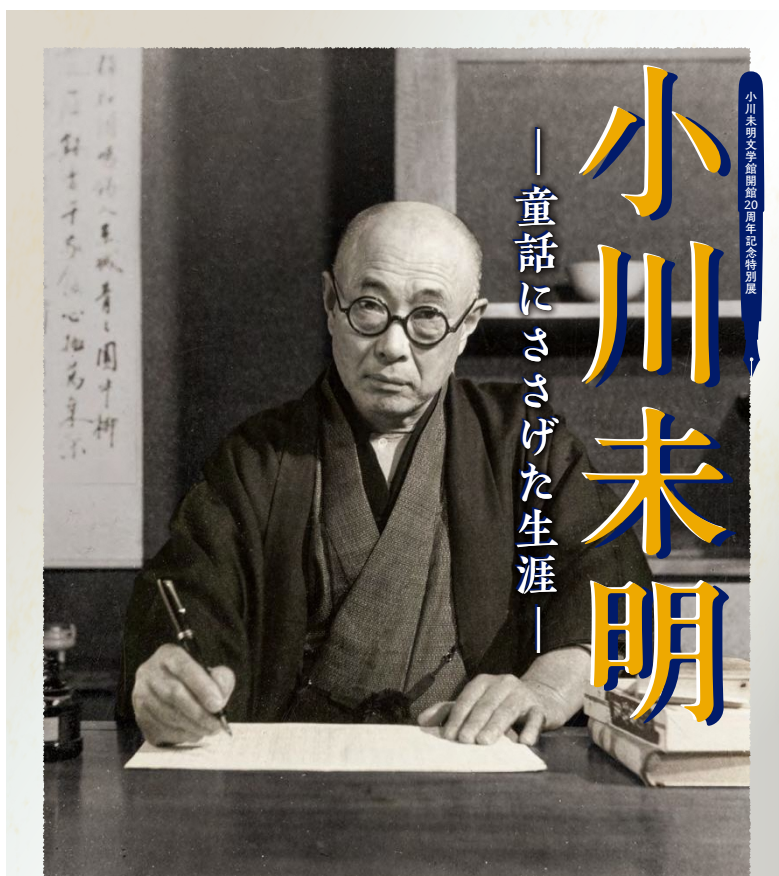


小川未明文学館開館20周年記念特別展

小川未明 一童話にささげた生涯一



小川未明文学館開館20周年記念特別展

小川未明 —童話にささげた生涯—

小川未明 (1950年2月、撮影/講談社)

2025年

10月4日(土) — 12月14日(日)

観覧無料

午前10時 — 午後6時 休館日: 月曜日(祝日の場合は翌日)、10月16日(木)、11月20日(木)

会場 小川未明文学館 市民ギャラリー

小川未明文学館

主催: 小川未明文学館

協力: 日本近代童話の父 小川未明顕彰会

〒943-0835 新潟県上越市本城町8-30(上越市立高田図書館内)
TEL: 025-523-1083 FAX: 025-523-1086
<https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/mimee-bungakukan>

特別展チラシ (写真: 小川未明 <1950年2月、撮影/講談社>)

小川未明文学館 館報

vol.20



小川未明文学館

新潟県上越市本城町8-30(高田図書館内)

TEL 025-523-11083

FAX 025-523-11086

小川未明文学館 館報 第20号

2026(令和8)年5月31日発行(年刊)

目次

【寄稿】

春日山神社 宮司 風間常樹彦氏

「小川未明と春日山」

2

【報告】

文学館1年の記録(令和7年度)

・ 展覧会

・ 各種イベント・講座等

4

【小川未明文学賞】

【未明ボランティアネットワークだより】

「のぼら」 Vol.22

13

14

【文学館からのお知らせ】

16

小川未明と春日山



風間 常樹彦氏

(春日山神社宮司)

日本のアンデルセンと言われ、日本の童話作家の礎を築いた小川未明は越後の国、新潟県上越市(旧高田市)に生まれました。近年は数年ごとに大雪に見舞われます。しかし、未明が誕生した頃には「この下に高田あり」などと新聞記事にもなった時代です。

縁あって平成27(2015)年に先代の小川清隆宮司より依頼があり、春日山神社宮司を承りました。現在春日山神社の社務所に住んでいます。本来、私は春日山山麓に鎮座する春日神社の第46代宮司でもあります。私の祖先は元々春日山に住み、本丸跡にあった春日神社の宮司でありました。しかし、上杉家(長尾家)が山城(砦)を築城するに当たり山麓の現在地に遷座しました。春日山山上に約五百年、現在地で約六百年の歳月が過ぎてきています。昔を辿れば、祖先の住居場所に六百年ぶりに戻り、感無量の

当時、両親がいましたので度々帰郷し、故郷で少年期を過ごした思い出を振り返りながら創作活動をしていたと聞いています。

未明の父澄晴は昭和10(1935)年87歳で亡くなりました。母千代はその後東京の未明宅で過ごし昭和12(1937)年85歳で亡くなりました。昭和15(1940)年には春日山神社境内に父母の墓を建立しました。境内から山頂に登る道の右側にあります。墓碑には「故山長に父母を埋めて我が詩魂日本海の波とならん 未明」と記してあります。

昭和28(1953)年未明は文化功労者に選ばれ、今までの作家活動が広く知れ渡るようになりました。故郷では受賞を祝い昭和31(1956)年春日小学校に「雪やみても木は黙し 鳥飛んで 海とおく鳴れり」、また春日山神社境内に「雲の如く高く くものごとくかがやき 雲のごとくとらわれず」の歌碑を建立しました。私は春日小学校6年生で除幕式に歌碑を合唱しました。その日の記憶は鮮明に残っていて、メロデーは今でも口ずさむことができます。未明は足がだいたい弱っていたようで、除幕式に抱えられながら来られたのを覚えています。

未明は昭和36(1961)年5月79歳で亡くなり、今年(2024)は没後65年となります。春日山神社には少年期を過ごした

日々を過ごしています。

未明は明治15(1882)年生まれ、私の祖父は明治19(1886)年生まれです。未明の父澄晴が春日山神社建立のため活動を始めたのが明治25(1892)年頃(未明10歳)からです。本格的に神社建築を始めたのが明治30年(1897)頃(未明15歳)です。一家は春日山に移住したので未明は春日山から高田中学校(現在新潟県立高田高等学校)に通学しました。その頃、私の祖父も未明と一緒に3年間同校へ通いました。当時は春日村から十数名が通学していました。今もわが家に通学団の写真が残っています。

現在、春日山神社の生活は頸城平野を見下ろし、夜景も美しく自然に恵まれた風光明媚な所です。しかし、冬の生活は雪に覆われ大変です。謙信公は雪深い中よく住んでいたと思います。多分、謙信公時代の冬には山麓の屋敷に移住していたのではと推察します。今のような車道もなく細い山道です。未明もここから高田中学に通ったと思えば、厳しい冬の生活を通して童話作家になる不屈の精神の育みが培われたのだと思います。

未明が過ごした社務所は昭和2(1927)年に風呂場の火の不始末から全焼しました。現在の社務所はその後再建されて今に至っています。春日山神社の社務所にはその

多くの思い出が残っております。社務所の土間にあった井戸は百数十年経っても崩れ枯れることなく今でも水を満々と貯えています。昨年、その水を使えるように修復しました。昨年の夏は大変な水不足であり、とても助かりました。春日山は謙信公が住んでいた山城だけあってとても水脈の豊かな所です。また、昭和46(1971)年境内に彫刻家横尾昭司氏制作の未明の童話代表作「赤い蠟燭と人魚」の像があります。半世紀近く経ち傷んできましたのでこちらも修復しました。この機会にと思い修復者に頼み「赤い蠟燭」を設置しました。説明看板も建て、未明の童話のモデル像であることをわかり易くしました。

未明記念館は現在休館中です。これも半世紀近く経っていますので傷みも激しく改装をしている所です。明治、大正、昭和時代に使われた小川家の生活用品、未明の結婚式祝詞、原稿、書籍、雑誌、親交のあった人々との手紙など未明に関わる品物が陳列されています。

毎年、全国から未明ファン、謙信ファンが合わせて数十万人訪れます。満足していただけるようにと日々境内整備、環境整備に努めているところです。

文学館1年の記録

令和7年度（2025年度）は、37586人の方からご来場いただきました。

〔展覧会〕

令和7年度は、特別展を2回、企画展を2回、特集展示を2回開催しました。

企画展「小川未明文学館開館20周年回顧展」

〈会期〉令和7年3月22日（土）

～4月20日（日）25日間

〈会場〉小川未明文学館 市民ギャラリー

△小川未明文学館は、小説家・童話作家として活躍した小川未明の顕彰施設として平成17（2005）年10月1日に開館し、令和7年に開館20周年を迎えました。

本展では、未明文学への理解を深め、次世代を担う子どもたちの豊かな心を育むため実施してきた様々な展覧会やイベント、各種講座など、小川未明文学館の20年の歩みを展覧会ポスターやチラシ、写真パネル等で紹介しました。

来場者からは、「これまでの取り組みが良かった」「当時のポスターが見られて嬉しい」「未明先生が地元で大切にされてきたことが伝わる」などの感想が寄せられました。来場者数3378人。

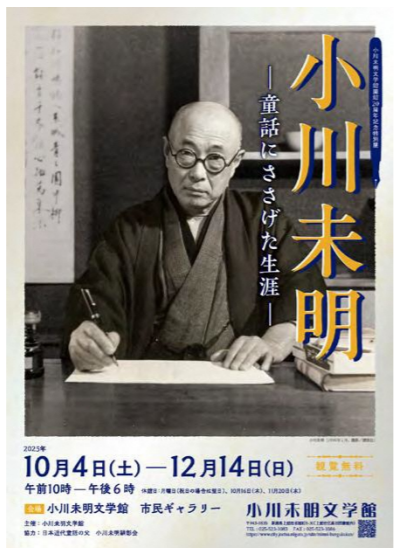
開館20周年記念特別展

「小川未明―童話にささげた生涯―」

〈会期〉令和7年10月4日（土）

～12月14日（日）60日間

〈会場〉小川未明文学館 市民ギャラリー



展覧会チラシ

△小川未明は、明治15（1882）年に新潟県中頸城郡高城村大字五分一（現上越市幸町）で生まれました。明治34（1901）年に東京専門学校（現早稲田大学）に入学、在学中に坪内逍遙に才能を見出され、明治37（1904）年に小説家としてデビューしました。

やがて未明は独自の作風で文壇で名をあげますが、のちに童話にこそ自らの天分があると思定め、大正15（1926）年に「今後を童話作家に」（『東京日日新聞』）を発表、童話の道に専心します。50年以上の作家人生で世に送り出した童話は1200編を超えており、童話のために生き、童



展覧会チラシ



展覧会の様子

話にささげた生涯でした。

本展覧会では、未明の自筆原稿や書籍、当時の写真、未明の愛用品などを展示し、「日本近代童話の父」といわれる小川未明の生涯について童話作品を中心に紹介しました。

来場者からは「見ごたえがあった」「未明の人生に沿って作品の理解が深められた」「童話集や原稿など、なかなか目にするのができない資料が沢山あって良かった」「作品を読んでみたくなった」などの感想が寄せられました。来場者数6565人。

〈主な展示資料〉

- ・『中学世界』（博文館、明治32年2月）
- ・小説「漂浪児」（『新小説』春陽堂、明治37年9月）
- ・小川健作宛坪内逍遙はがき（年月不詳13日消印）
- ・『小川未明選集』全6巻（未明選集刊行会、大正14年～15年）
- ・『未明童話集』全5巻（丸善、昭和2年～6年）
- ・小川未明自筆原稿「童話雑誌「お話の木」を主宰するに当りて宣言す」（昭和12年、小川家所蔵）
- ・小川未明自筆ノート「かたい大きな手・たましいは生きている」（昭和23年、小川家所蔵）
- ・小川未明自筆色紙「雲の如く」（小川家所蔵）
- ・小川未明詩軸「明日の社会を」（昭和26年頃）
- ・小川未明自筆原稿「ふく助人形の話」（昭和32年、小川家所蔵）
- ・小川未明詩軸「星の如く」（小川家所蔵）ほか

特別展「第33回小川未明文学賞展」

〈会期〉令和7年4月26日（土）

～5月25日（日）24日間

〈会場〉小川未明文学館 市民ギャラリー

△第33回小川未明文学賞の応募作品639編の中から大賞・優秀賞に選ばれた受賞者の喜びの声やその作品の講評、選考過程などを紹介しました。

また、上越市で開催された贈呈式の様子、これまでの大賞受賞者とその作品のほか、書籍化された第32回小川未明文学賞大賞受賞作品（2024年）、古都こいと作『きさらぎさんちは今日もお天気』の書籍表紙パネルや校正原稿（株Gakken提供）などを紹介しました。来場者数2150人。



展覧会の様子



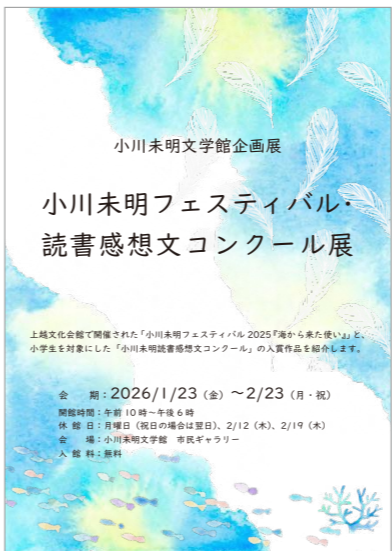
展覧会の様子



企画展「小川未明フェスティバル・読書感想文コンクール展」

〈会期〉令和8年1月23日(金)
〜2月23日(月・祝) 26日間
〈会場〉小川未明文学館 市民ギャラリー

令和7年11月24日に上越文化会館で開催された「小川未明フェスティバル2025」の様子を写真パネルで紹介しました。
また、未明童話「海から来た使い」を課題図書とした「小川未明読書感想文コンクール」の受賞作文や、同コンクールの審査委員である小笠裕二氏(上越教育大学教授)の講評も紹介しました。
来場者からは「子どもたちの感受性に驚いた」「感想文がすばらしかった」「未明の作品に改めて興味を持った」などの感想が寄せられました。来場者数1937人。



展覧会チラシ

特集展示2

「100年前の未明—1926年—」

〈会期〉令和7年12月26日(金)
〜令和8年6月14日(日)
〈会場〉小川未明文学館 常設展示場

本展では、100年前となる大正15(1926)年の未明の活動や作品に焦点を当てました。
この年は、未明が人生の大きな決断をした年でした。5月に東京日日新聞に「今後は童話作家に」を発表、小説の筆を折り、童話に専心することを宣言します。宣言後は童話作家として多くの新作童話を世に送り出すとともに、童話作家の地位向上にも努め、「日本近代童話の父」と称されるようになります。

〈主な展示資料〉

- ・感想「理想の世界」(『未明感想小品集』創生堂 大正15年5月)
- ・感想「童話の作者として」(『エスペラント文芸』四方堂、大正15年5月)
- ・童話「町の天使」(『赤い鳥』赤い鳥社、大正15年1月)
- ・童話集「兄弟の山鳩」(アテネ書院、大正15年4月)
- ・童話集「海から来た使ひ」(創生堂、大正15年7月)
- ・童話集「蜻蛉のお爺さん」(創生堂、大正15年12月) ほか

〈読書感想文コンクール受賞者と受賞作文〉

- ・大賞 保坂芽依さん(小6)
「海から来た使ひ」を読んで
 - ・優秀賞 中村颯志さん(小4)
「天使の試練に映る人間の姿」
 - ・優秀賞 渡邊陽菜さん(小1)
「うみからきたつかい」をよんで
 - ・杉みき子賞 山田理紗さん(小5)
「天使から教わったやさしさ」
 - ・内田エネルギー科学振興財団賞 科澤真由さん(小3)
「今年も見守ってね」
 - 科澤妃南さん(小4)
「三つの季せつと少女の気持ち」
 - 佐藤万友さん(小6)
「天使の気持ちと私の気持ち」
- ※()内は受賞時の学年



展覧会の様子



展覧会の様子



特集展示1

「新収蔵品展—令和6年度収集資料—」

〈会期〉令和7年6月27日(金)〜12月21日(日)
〈会場〉小川未明文学館 常設展示場

小川未明文学館では、未明に関する様々な資料を収集しており、これらの資料を活用して特集展示を開催しています。

特集展示1「新収蔵品展」では、令和6年度に新たに収集した資料の中から、未明自筆の色紙やはがき、初出童話が掲載された絵雑誌などを紹介しました。

〈主な展示資料〉

- ・小川未明色紙「去年の小鳥」
- ・小川未明はがき(相賀祥宏君追悼録編集會宛)
- ・小川未明はがき(少年文学社宛)
- ・小川未明はがき(二反長半宛)
- ・童話「春ハ、オ母サンデス」(『コドモノクニ』東京社、昭和10年4月)
- ・童話「海ノオ姫様ノ頸飾」(『コドモノクニ』東京社、昭和10年9月)
- ・童話「小父サン バンザイ」(『コドモノクニ』東京社、昭和11年7月)
- ・童話「秋ガ来マシタ」(『コドモノクニ』東京社、昭和13年10月)
- ・童話「アスファルトノミチ」(『コドモノクニ』東京社、昭和16年5月) ほか

「各種イベント・講座等」

小川未明文学館子ども祭

〈日時〉令和7年5月10日(土)
午前10時〜午後3時
〈会場〉小川未明文学館 出合いのロビーほか

子どもたちに文学館や未明童話に親んでもらうため、小川未明文学館子ども祭を開催しました。今回は、文学館が開館20周年を迎えたことから、誕生日をイメージした「飛び出すバスデーカード作り」・「厚紙や段ボールで作るケーキ作り」・未明童話「五月の川の中」をイメージした「ゆらゆらこいのぼり作り」などの工作やクイズを行いました。当日は高田図書館子ども祭と同日開催であったため、大勢の子どもたちが来場しました。参加者数延べ254人。



ケーキ作り



バスデーカード作り

童話創作講座

〔日時〕 令和7年5月25日(日)、6月22日(日)、
7月27日(日) いずれも午後2時～4時
〔会場〕 高田図書館 第1会議室

〆牧野節子氏(児童文学作家)を講師にお招きし、
短編童話の書き方を学ぶ初心者向けの童話創作講
座を開催しました。

講座では、童話の基礎と基本的な書き方や創作
技術の高め方について、具体例を基に学びを深め
たあと、実際に受講者の皆さんから短編童話を創
作してもらいました。この作品を講師から丁寧に
講評いただいたり、受講者同士で互いの作品に
ついて意見交換を行ったりして、今後の創作の参
考にしました。

受講者からは「童話の書き方を基本から教えて
もらえて良かった」「テーマをいくつか提案して
もらったので、構想を膨らませることができた」
「作品の講評がとてもためになった」「童話を書く
仲間が身近にいることがうれしい」などの感想が
寄せられました。受講者数10人。



講座の様子



講師の牧野節子先生

朗読研修会

〔日時〕 令和7年6月14日(土)、6月21日(土)、
7月5日(土) 午後2時～4時、最終日は
午後4時30分まで

〔会場〕 高田図書館 第1会議室 / 小川未明文学館
市民ギャラリー

〆橋由貴氏(朗読療法士・ヴォイスアーティスト)
を講師にお招きし、朗読研修会を行いました。

はじめに基本的な声の作り方や表現力の磨き方、
発声練習の大切さを学び、「聴き手の心に届く朗読
をするには」という講義に耳を傾けました。次に
発声練習や開口訓練を行い、その後、グループに分
かれて未明童話「月夜と眼鏡」(大正11年7月)を
朗読し、講師から指導を受けました。受講者数20人。



講座の様子

文学館講座

小川未明やその作品について学ぶ文学館講座を
全3回開催しました。受講者数は延べ99人。

●第1回文学館講座

〔講師〕 宮川健郎氏(児童文学研究者・武蔵野大学
名誉教授)

〔演題〕 日本の子どもの文学における「詩的なもの」
と「散文的なもの」——小川未明を軸に考
える——

〔日時〕 令和7年7月6日(日) 午後2時～3時30分
〔会場〕 小川未明文学館 市民ギャラリー



〆日本の子どもの文学は、敗戦後に、小川未明ら
の詩的な「童話」を克服して、もっと散文的な「現
代児童文学」へ転換したと考えられてきました。
戦後80年の節目の年に、この児童文学史を見直す
お話をいただきました。

前半では、石井桃子ほか『子どもと文学』(中
央公論社、1960年)で、小川未明・浜田広介・

坪田譲治が否定的に評価されるなどのことがあつ
て、詩的・象徴的なことばで心象風景を描く短編
の童話から、もっと散文的なことばで、子どもを
めぐる状況(社会)、あるいは、状況(社会)と
子どもとの関係を描く長編の現代児童文学へと変
わったと考えられるというお話がありました。し
かし、この考えかたは「進歩史観」かもしれない
ともおっしゃいました。さらに、広介の「コブタ
ノ トコトコ」を例にあげ、広介などの童話は、
幼年が読者対象であったため、リズムがよくて音
読に向いているのに対し、現代児童文学は、音読
する「声」とわかれて、黙読で物語を楽しむこと
ができる十代の子どもが読者の中心になり、書き
ことばとして緻密化し、長編化していったと説
明いただきました。

後半では、国語の教科書のお話がありました。
教科書には、ページ数が多くなることから現代児
童文学のような長編を載せることができないため、
いまでも賢治や南吉の童話のついで(以前は
未明の「野薔薇」も)、現代の童話作家である、
あまんきみこの作品の掲載も多いとのこと。
かつて未明を批判した古田足日が「童話・小説の
流れ その問題点」(日本児童文学者協会編『児
童文学の戦後史』東京書籍、1978年所収)の
なかで、「童話」を死滅するものと考えた点を
あやまりであったとし、あまんを「小川未明の正
当な後継者である」としているとお話しいた
きました。一方で、散文性を獲得した例として古



講座の様子

田足日・田畑精一「おしいれのぼうけん」(童心社、
1974年)をあげ、本作は異例に長いテキスト
の絵本だが、日常的な言葉を用いて新しい物語を
描き出したもので、大勢の人に長年読み継がれて
いるとお話されました。

まとめとして、日本の子どもの文学は戦後に現
代児童文学へと転換し、長編化することで戦争や
社会を描くことができるようになったが、今もな
お世界の至るところで争いが続いている状況を考
えると、詩的な童話と散文的な現代児童文学のど
ちらが有効かという問いは、あまり意味がないと
し、両者のもつ可能性について示唆されました。
受講者数34人。

●第2回文学館講座

〈講師〉小笠裕二氏（上越教育大学教授・小川未明文学館専門指導員）
 〈演題〉未明童話・1920年代の激動と豊饒
 〈日時〉令和7年10月5日（日）午後2時～3時30分
 〈会場〉高田図書館 第1会議室



△大正9（1920）年から昭和5（1930）年までの10年間を、〈未明童話における1920年代の時代〉と西暦で位置づけなおし、その時代の中で、未明がいかに彼の童話を豊かに成立させたか、また厳しい時代情勢のなかで、それに対抗するために童話の姿を変えていったかを、いくつかの童話を紹介しながら、お話しいただきました。まず、1920年代の社会情勢について、当時の日本は第1次世界大戦の特需の反動や関東大震災などがあり、貧富の差が拡大し、社会主義思想が広まった時期であるとし、このときの文学状況は、経済不安などから社会変革を訴えるプロレタリア文学が興隆したと解説いただきました。1920年代は、未明にとって小説と童話の双

方の名作が書かれたが、1920年代になると小説の数より童話の数が上回るようになり、1930年代になると童話ばかりが発表されるようになるとの指摘のあと、1920年代の激動と豊饒の始まりを示す象徴的な童話として、「野薔薇」（1920年4月）と「赤い蠟燭と人魚」（1921年2月）の紹介が行われ、この時代の社会の激動に立ち向かおうとする未明の思いの強さが作品の強度となり、名作を生み出したことをお話しいただきました。また、クロボトキン『相互扶助論』の影響を受け、弱いものが扶けあつて暮らしていくことに将来の社会の姿を見ようとした未明が、相互扶助を童話の基軸におく「黒い人と赤い権」「月夜と眼鏡」（ともに1922年）を書いたこと、大正期後半の激動の時代には「沙漠の町とサフラン酒」「月とあざらし」「白い熊」などを書き、新たな美や調和の世界を見いだしたこと、1930年に「青いランプ」を書き、天命への自覚を抱いたことなどを説明されました。

1920年代は日本の激動の時代でした。それに即応しながら文学で戦った軌跡が未明文学の豊饒をもたらし、未明の不惑の四十年代が、1920年代の時代の激動と重なったことが未明文学の激動と豊饒を生み出す大事なモメントとなったとまとめられました。受講者数33人。



講座の様子

●第3回文学館講座

〈講師〉古畑茉莉子氏（公益財団法人浜田広介記念館 学芸員）
 〈演題〉ひろすけ童話のはじまり～「黄金の稲束」から「ひろすけ童話読本」まで～
 〈日時〉令和7年11月15日（土）午後2時～3時30分
 〈会場〉高田図書館 第1会議室

△浜田広介の作家デビューから『ひろすけ童話読本』を刊行するまでの生い立ちや作品、浜田広介記念館の概要や活動についてご紹介いただきました。

前半では、浜田広介の随筆「未明先生の業績」（『早稲田学報』、昭和28（1953）年12月）や「今年の童話と童謡」上―有島武郎氏と小川未明氏―（『都新聞』、大正11（1922）年12月）などから、広介と未明の関わりや未明作品に対する思い、尊敬する作家を聞かれた際に未明を挙げていたエピソードなどをお話しいただきました。

また、広介の生い立ちについては、大阪朝日新聞の懸賞新作お伽噺に「黄金の稲束」が一等入選したことが転機となり作家デビューを果たしたことや、『良友』の編集をしながら同誌に童話・童謡等を発表していたこと、鈴木三重吉から『赤い鳥』の寄稿依頼があったにも関わらず、納得のいく作品が書きあがらないまま創刊号が出てしまったこと、関東大震災を機に定職に就くことをやめて、童話の道ひとすじに生きる決意をしたことな

ど、大正期の出来事を中心に説明いただきました。さらに、代表作「泣いた赤おに」は元々「おにのさうだん」というタイトルで、広介には推敲癖があるので絵本によって異なる表現の楽しみ方があること、七五調の文章で耳にも心地よい文章であることなどをお話しいただきました。後半では、山形県高島町にある浜田広介記念館の設立経緯や施設概要・組織体制のほか、企画展や子どもを対象としたイベントの開催、全国を対象にした童話造形創作や童話感想文・感想画のコンクールの実施、高島町の入学児童に配布している「ひろすけ童話セット」の作成などの活動についてご紹介いただきました。受講者32人。



講座の様子

文学館おはなし会

〈日時〉毎月第2・4日曜日 午前11時～
 〈会場〉小川未明文学館 ビッグブックシアター

△未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワークの協力により、未明童話を中心としたおはなし会を19回（大雪のため1回中止）開催しました。参加者数延べ257人。

出張おはなし会

△未明童話に出会う機会をより多くの子どもたちに提供するため、未明ボランティアネットワークの協力により、市内の小学校に出向く出張おはなし会を開催しました。令和7年度は、市内小学校8校（10回）訪問し、参加者は延べ353人でした。



出張おはなし会の様子

こどもプログラム 未明童話と親しもう

—こどもたちに届けたい未明のメッセージ—

未明童話をより多くの子どもたちに読んでもらうため、月替わりで未明童話1作品を冊子にして無償配布しています。参加者には「おはなしカード」を配布し、集めたシール数に応じて、文学館オリジナルグッズをプレゼントしました。

配布数延べ1294冊。

○配布童話（低学年用）

- ・4月「窓の外へ春が来た」
- （初出「コドモノクニ」、昭和11年3月）
- ・5月「かくれんぼ」
- （初出「コクミン一年生」、昭和16年4月）
- ・6月「川へふなをにがす」
- （初収録「太陽と星の下」、昭和27年）
- ・7月「海のおばあさん」
- （初収録「ドラネコと鳥」、昭和11年12月）
- ・8月「雲、雲、いろいろな雲」
- （初出「コドモアサヒ」、昭和5年7月）
- ・9月「お月さまと象」
- （初出「コドモノヒカリ」、昭和12年7月）
- ・10月「おほしさま」
- （初出「キンダーブック」、昭和26年7月）
- ・11月「かりゅうどとくま」
- （初出「家の光」、昭和14年10月）
- ・12月「おおかみとチョコレート」
- （初出「スキー」、昭和8年12月）

○配布童話（中学年用）

- ・1月「兄弟の野ねずみ」
- （初出「コドモノヒカリ」、昭和12年1月）
- ・2月「雪だるまとおほしさま」
- （初収録「未明カタカナ童話読本」、昭和11年3月）
- ・3月「たまとうぐいす」
- （初出「コドモノクニ」、昭和7年12月）
- 配布童話（中学年用）
- ・4月「野ばら」
- （初出「大正日日新聞」、大正9年4月12日）
- ・5月「ろうそくと貝がら」
- （初出「読売新聞」、大正8年6月7日、9～10日）
- ・6月「眠い町」
- （初出「日本少年」、大正3年5月）
- ・7月「金魚売り」
- （初出「赤い鳥」、昭和2年6月）
- ・8月「てかてか頭の話」
- （初出「童話」、大正9年10月）
- ・9月「幸福のはさみ」
- （初出「婦人界」、大正11年11月）
- ・10月「月夜とめがね」
- （初出「赤い鳥」、大正11年7月）
- ・11月「月とあざらし」
- （初出「愛の泉」、大正14年4月）
- ・12月「金銀小判」
- （初出「良友」、大正9年1月）
- ・1月「ゆずの話」
- （初収録「小学文学童話」、昭和12年5月）
- ・2月「黒い人と赤いそり」
- （初出「赤い鳥」、大正11年1月）
- ・3月「角笛吹く子」
- （初出「童話」、大正10年3月）

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、1991年（平成3）に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮やかな児童文学作品を募集しています。

2025年度で第34回を迎え、801編の作品が国内外から寄せられました。大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。



撮影／徳永 徹

第34回小川未明文学賞大賞受賞



樹 あゆりさん
大賞作品
「つごんの神さま」

散歩をしているとき、家事をしているとき、なにげに心が風いだとき、ふと物語の断片が降ってくることはありません。

「ある日、店の閉じまりをしようとしたら見知らぬおじさんが倒れていた。そのお店は、うどん屋さん。見つけたのは小学生の男の子とお兄さんだった」

今回はそこから物語が始まりました。剣道は、家族が子どもの頃からやっておりましたので、いつか剣道の試合を書いてみたいと思っていました。うどん屋さん、という設定は、言わずがな、うどん県民ゆえの選択でした。

主人公の陽翔は、頭の中でポンツと生まれると、一人で勝手に動く、しゃべる、笑う、泣く。書き手の私は大いに翻弄されましたが、最後まで楽しみながら着地することができました。

このたび、ずっとあこがれていた小川未明文学賞大賞に選んでいただけましたこと、心より感謝申し上げます。書き続けて本当に良かったと思いました。

この元気で気の優しい主人公が、一人でも多くの友達や児童文学を愛する方々に読まれ、面白い子だな、と笑顔になってもらえたら幸いです。

季節のワークショップ

〈期間〉七夕ワークショップ…

令和7年6月10日（火）～7月6日（日）
クリスマスワークショップ…

令和7年12月2日（火）～12月25日（木）

〈会場〉小川未明文学館 出合いのロビー

七夕とクリスマスの季節にあわせて、参加者が自分の願い事などを書き記すワークショップを行いました。子どもから大人まで、たくさんの方が参加してくださいました。参加者数延べ274人。



クリスマスワークショップの様子



第35回募集要項

◆募集作品

- ①短編部門（小学校低学年向け）
 - ：400字詰め原稿用紙20枚～30枚以内
 - ②長編部門（小学校中学年以上向け）
 - ：400字詰め原稿用紙60枚～120枚
- いずれも小学生を読者対象とした創作児童文学で未発表の作品。各部門同時応募も可（各部門1編のみ）。
- パソコン等で原稿を作成する場合は、A4用紙を横長に使用。原稿は縦書きで作成。
- 表紙に題名、筆名、本名、年齢、職業、性別、郵便番号、住所、電話番号、枚数を明記。
- 生成系AIのみで作成した作品は応募不可。
- 原稿用紙2枚程度のあらすじを表紙下に綴じる。

◆応募資格

不問

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参、メール

◆締切

2026年10月31日（土）（当日消印有効）

◆入選作

- ・大賞（賞金100万円・記念品）
- ・優秀賞（賞金20万円・記念品）

*詳細は小川未明文学館ホームページをご覧ください
だくか、左記にお問い合わせください。

応募・お問い合わせ先

〒940-0001 新潟県上越市木田1-1-13
上越市文化振興課
「小川未明文学賞担当」
（「」部分は朱書き）



のばら vol.22

未明ボランティアネットワークだより

発行：未明ボランティアネットワーク
発行日：2026年5月31日

2025年度 の活動

- ・小川未明文学館ビッグブックシアターおはなし会 … 全19回、延べ参加者257人
- ・特別展おはなし会（小川未明文学館市民ギャラリー） … 参加者38人
- ・会員の研修会（大越さとみさんのおはなしⅡ）
- ・出張おはなし会（小学校） … 10回、353人

おはなしジャンボリ“オーレ” 3月20日(金・祝)



オーレプラザでのお話の会に参加して

昨年に続き今年もスタジオで3作品を上映しました。「山の上の木と雲の話」「なんでもはいます」「月夜と眼鏡」です。

なおえつおやこ おはなし会

7月21日(月・祝)



「くらげのおばさん」「夏の晩方あった話」「ぬながわ姫」「赤い蠟燭と人魚」の4作品をペープサートと音楽(ライアー)と映像で楽しんで頂きました。

わくわくトライアル

11月15日(土)



リージョンプラザで行われた体験型イベント「スポーツ&カルチャーわくわくトライアル」に参加しました。パネルシアターや絵本を使って朗読の楽しさを子ども達に伝えました。

JCVIに出演

12月9日(火)、1月13日(火)



初めてのTV出演にドキドキわくわくでした。「泣かないきりぎりす」「雪のふった晩の話」パネルシアターで生き生きと動く動物たちの姿を通して、未明童話の心やさしいお話を届けました。

文学館おはなし会

毎月第2・第4日曜日 11時～



未明童話の会 【春がくる前】

さびしい野原の中に立つ一本の木と一羽の小さなうぐいすとの出会いとやさしい会話が心が和みます。3枚の映像も素敵でした。



シャープの会 【水車のした話】

パネルシアターと水音が出る楽器を使って、雰囲気を出しました。たくさんのお客様に聞いて頂きました。

出張おはなし会



グループ空 10月30日 浦川原小学校

低学年は「三匹のアリ」「子ざると母ざる」高学年は「千羽鶴」「野ばら」の朗読を聞いてもらいました。小川未明のお話を通じて楽しい時間を共有することができました。



シャープの会 11月20日 和田小学校

「金の輪」「殿様の茶碗」「野ばら」を映像やパネルシアターと共に朗読しました。難しいテーマを含む会でしたが、さすが5・6年生、最後まで真剣に耳を傾けてくれました。

研修会 大越さとみさんのお話

10月21日(火)



昨年に続き「心に届く語りとはⅡ」として今年は具体的に、読み聞かせでの大切な事柄をご指導頂きました。特別展上映作品を全員一人一人の読み合わせで具体的にご指導頂き大変有意義でした。今後の活動に生かしたいと思います。

未明フェスティバルでの活動

11月24日(月・祝)



市民サロンで「子ざると母ざる」を大型紙芝居で演じました。拍子木の音で始まり、和やかな雰囲気の中で楽しんで頂きました。

特別展おはなし会

10月26日(日)



今年から午前11時に時間を変更しました。映像や受付場所等の工夫もあり、図書館を利用される多くの方々から足を止めて下さり、未明童話の世界を楽しんで頂きました。

作品名	担当グループ
①「ゆずの話」	未明童話の会
②「千羽鶴」	グループ空
③「水車のした話」	お話の会うさぎ
④「野ばら」	シャープの会

出張おはなし会、会員加入の連絡先

上越市文化振興課 上越市木田1-1-3 / 電話 025-520-5628 / FAX 025-520-5853

● お知らせ ●

小川未明関係資料の収集について ご協力をお願い

小川未明文学館では、未明に関係する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いいたします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問合せいただくと幸いです。

【主な収集資料】

1. 特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

2. 図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所収した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3. 参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

令和8年度 小川未明文学館カレンダー

- 4月 春季企画展「未明童話「春」のいろいろ」
(3/20(金)祝～4/19(日))
特別展「第34回小川未明文学賞展」
(4/25(土)～5/24(日))
- 5～7月 小川未明文学館こども祭 5/9(土)
童話創作講座 5/24(日)、6/28(日)、7/26(日)
特集展示1「新収蔵品展」(6/26(金)～12/20(日))
朗読研修会 6/13(土)、6/20(土)、7/4(土)
第1回文学館講座 7/11(土)
- 10月 特別展「高岡洋介が描く『ものぐさじじいの来世』絵本原画展」(会期：10/3(土)～12/6(日))
第2回文学館講座(ギャラリートーク) 10/24(土)
特別展おはなし会 10/25(日)
第35回小川未明文学賞募集締切 10/31(土)
- 11月 第3回文学館講座 11/7(土)
- 12月 特集展示2「100年前の未明」
(12/25(金)～R9/6/13(日))
- 1月 企画展「小川未明フェスティバル・読書感想文コンクール・童画コンクール展」(R9/1/28(土)～2/28(日))
- 3月 第35回小川未明文学賞贈呈式(上越)
- 未明ボランティアネットワークによるおはなし会
毎月第2・4日曜日の午前11時から文学館にて実施
*観桜会期間中と1月はお休みします

◆ 問合せ
〒943-0835
新潟県上越市木田町8-30(高田図書館内)
TEL 025-523-1083
FAX 025-523-1086
URL <https://www.city.joetsu-niigata.jp/site/minei-bungakukan/>



- ◆ 入館料 無料
- ◆ 休館日
毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)・
祝日の翌日・館内整理日(毎月第3木曜)・
資料整理期間・年末年始(12/29～1/3)
- ◆ 開館時間
午前10時から午後6時
- ◆ 小川未明文学館 利用案内

発行 上越市文化振興課

〒943-8601 新潟県上越市木田1-1-3 / TEL.025-520-5628 / FAX.025-520-5853